

YAおすすめ ブックリスト

第25弾

2018.3 発行



くにたち中央図書館

こんにちは!(・ω・´)としぞうだよ。
早いもので、また春がめぐって来たよ。新しいYAスタッフたちが入ってきてくれるからの一年間、あっという間だったなあ。
去年は、夏に『東大合格生のノートはかならず美しい』の著者、太田あや先生を招いて「美しいノートの取り方ワークショップ」を開催したなあぐ(*´▽`*)しみじみ～
YA コーナーで本を紹介するために、POPもたくさん作ったなあ。自分のおすすめした本が借りられていると、けっこううれしいんだよね(*θωθ*)

そんなこんなので、2018年もYAスタッフの募集をいたします！
本が好きな人、図書館の活動に興味がある人はぜひ、ご応募ください。
詳しくは、市報、ホームページ、図書館の掲示を見てね。9(๑´▽`๑)

おしえて? としぞう



Hey としぞう、「高校生直木賞」っていうのがあるって本当？

答えは Yes! 全国の高校生たちが集まって話し合い、今年一年間の直木賞の候補作から「今年の1作」を選ぶ試みのことだよ。フランスには、読書教育の一環として「高校生ゴンクール賞」なるものがあって、その日本版を目指して2014年5月に第1回を開催。全国4都県の高校生代表者8名からスタートしたんだ。

第1回・参加4校・受賞作『巨鯨の海』 第2回・参加12校・受賞作『宇喜多の捨て嫁』

第3回・参加19校・受賞作『ナイルパーチの女子会』 第4回・参加21校・受賞作『また、桜の国で』



としぞう



この賞で受賞作に選ばれた本は、くにたち図書館では一般小説コーナーに置いてあるみたい



そもそも、高校生ゴンクール賞てなんなん？

お教えいたします！フランスには「ゴンクール賞」という有名な文学賞があるんだ。それとは別に、「高校生のゴンクール賞」はゴンクール・アカデミーから発表された推薦リストをもとに、フランス全土の選ばれし高校生たちが話し合いと投票で受賞作を決定するものなんだ・・・



もとはレンヌ市(仏)の教師が、生徒を現代文学に親しませようと始めたささやかな読書教育の試みだったけど、国民教育省と某大手書店がかかわるようになり全国に広がったというわけである・・・とメモに書いてあるみたい

カンペをばらさないで～(´;ω;`)



「あなたに新しい出会いを」～YAよりの招待本～

「言いまつがい」(糸井重里：監修/新潮社/YA・Bい)

人の言いまちがいは、たくさん耳にするとおもいますが、誰かに話したくなるほど面白い言いまちがいは、なかなか出会えるものではありません。この本には、そのレベルの言いまちがい、いや、「言いまつがい」がたくさん載っています。

笑いをこらえるのが大変なので、公共の場では読まないことをオススメします。



「北欧女子オーサが見つけた日本の不思議」

(オーサ・イエークストロム：著/KADOKAWA/YA 361)



オーサはスウェーデンからやってきた日本大好きな専門学校生。幼き日に人生が変わるほどの衝撃を受けた日本に住むこととなって、3年。彼女が体験した「すご〜い」「実におもしろい」「驚き桃の木山椒の木」「えっ〜」「？」な出来事をカラフルなイラストでご紹介♪日本という国を新たに、ふしぎ発見！(・ω・)



「お弁当。」(パルコエンタテインメント事業部/2013.9/914.68)



食べ物について書いてある本は、読んでいて楽しい。レシピ本を眺めるのも良いけれど、たまにはがっつり食べ物エッセイを読むのも素敵だ。この本は総勢41名の大人が真面目に(時にはふざけて)お弁当について語っているエッセイ集。読んでいるとお腹がすいてきちゃうのが難点かも？



「新聞力ーできる人はこう読んでいるー」(斉藤孝：著/ちくまプリマー新書 263/S)

YA世代で、新聞を毎日読んでいる方はそう多くはないのではないでしょうか。新聞を読めば、社会力、思考力、文章力など様々な力がつきます。この本には、なぜそのような力が必要なのか、また、なぜこのネット社会にあえて新聞を読むのか、といったことが書いてあります。今から新聞を読んでおけば、あるとき、周りより一歩リードした自分に気付くはず！！



「マリア様がみてる」(今野緒雪：著/集英社/YA・Bこ)

舞台は東京都武蔵野の丘の上にある「私立リリアン女学園高等部」。明治より続くカトリック系ミッションスクールで名家の令嬢が多数通う、お嬢様学校。「スール制度」や「薔薇さま」など長い伝統に培われた独自の学園文化が築かれております。主人公である福沢祐巳は学園の中でも一般平均の庶民。そんな祐巳が憧れの先輩である小笠原祥子から声をかけられることから物語は始まります。遠くから眺め憧れ想像するしかなかった世界に一步踏み込み、成長してゆく祐巳の姿をどうぞご覧下さい。



「凍てつく海のむこうに」(ルータ・セペティス：著/岩波書店/YAセペ)

小説の舞台は、第二次世界大戦末期の東プロイセン。ソ連軍の侵攻が始まるなか、ナチス・ドイツ政府は住民たちをバルト海経由で避難させる<ハンニバル作戦>を敢行する。運命に翻弄される4人の若者が、この物語の主人公だ。

「歴史モノはちょっと……」って身構える人もいるかもしれない。でも、まずは1ページ目の、主人公の一人であるヨアーナの話聞いてほしい。

この物語は若者たちの独白で進んでいく。彼らはそれぞれに秘密を抱えていて、その秘密を簡単には読者に教えてくれない。読者は彼らの秘密を知るためにページをめくっていくのだが、気づいたときには物語の世界にどっぷりとはまってしまっているのだ。

歴史が好きな人にも、そうでない人にも、ぜひ手にとってもらいたい1冊だ。